

発行・編集 ミニコミ編集委員会  
責任者 古我照彦  
事務局 船橋まちづくりセンター  
電話 3482-0341  
2014. 5 特別号



まちの目が  
安全・安心を守っています

船橋地区町会・自治会連合会  
船橋地区身近なまちづくり協議会  
青少年相談地区委員会/成城警察署/成城防犯協会



# ちとせ



## 「人と人のつながりを — 近隣の方たちと話してみませんか」

### 3・11を忘れない 被災地に思いをはせる

東日本大震災から3年。

被災地では今なお厳しい生活が続いています。

3・11を風化させないために、私たちにできることは。

「3・11を忘れない！」実行委員会主催の追悼集会和、津波で祖父母を失った青年の声を紹介します。

平成26年3月11日午後2時46分、千歳船橋駅前広場には、黙祷を捧げる地元住民が多く集まった。未曾有の被害をもたらした東北地方太平洋沖地震が発生した同じ日時、追悼イベント「3・11を忘れない！」の1コマである。

#### 世代を超えて

第2回目の今年は、船橋地区町会・自治会連合会が呼びかけ、実行委員会が主催した。

LEDキャンドルライトの千枚もの灯籠絵は地域の小学校の児童が描いてくれたもの。船橋・希望丘・千歳台・笹原・桜丘の各小学校が全面的に協力してくれた。また、演奏や合唱、朗読、ダンス等を通して追悼に花を添えてくれた中学校・高等学校やグループ等が積極的に参加。音響一式を機材持込みでやってくれた店主、その他多くのスタッフ等の協力があった。イベントは盛り上がったのであった。

#### それぞれの思いを込めた追悼

「3・11を忘れない！」は、3日間実施。黙祷は、午後2時46分、3日間を通して行った。

日曜日の9日には、地域の中高生による吹奏楽演奏をはじめ、思い思いの表現で追悼した。

午後1時開会には、ヴァイオリン演奏、吹奏楽演奏、詩の朗読、等々が行われ、午後5時半の閉会まで幕間



黙祷は、午後2時46分、3月9、10、11日の3日間駅前広場で行われた。



灯籠は、スタッフだけでなく、当日会場に訪れた参加者も加わって飾り付けられた。

がないほどであった。これに続き、キャンドルライトを飾り付けてあるそれぞれの灯籠に入れ、鎮魂のお膳立てを整え、帳が下りるのをただ待つのであった。

薄暮から徐々に暗さが増し、商店街会館の壁面広告の照明も消灯されると、灯籠たちが浮かび上がり、道行く人々も立ち止まるなど、鎮魂の雰囲気は昇華するのであった。

地域を挙げて  
**「3・11を忘れない！」**  
開催される  
—千歳船橋駅前広場で—

11日は午後2時に開会、9日同様に灯籠の飾りつけの中、ヴァイオリン演奏にコーラスが捧げられ、黙祷が行われた。また、3日間の募金の届け先に決まっている石巻市の北上小学校と交流のある千歳台小学校・塚田俊雄校長先生から、これまでの交流の紹介があった。会場全員で合唱を捧げ、閉幕となった。

3日間を通じて募金活動が行われ、若者男女を問わず多くの方々から厚意をいただいた。総額は100万円近くに上った。

#### 忘れないことの意味

開会の辞の中で、吉田仁実行委員長は、「この追悼式典を今年にとどまらず、来年以降も継続して行う」との強い意思表明を行った。

被災地では、まだ多くの方が仮設住宅に住むことを余儀なくされ、従前の生活を取り戻すには程遠い状況が続いている。復興はおろか、復旧さえままならぬ状況もある。その状況に対して、遠くにいる私たちに何ができるのか？

3・11を忘れないとは、犠牲になった方々に鎮魂を捧げると共に、いつ起こるかしない大災害に対し、私達も備えていかなければならないことを、肝に銘じることがかもしれない。被災地への想いを抱きながら、自らの備えの糧とすることができるとすれば、実行委員長の言葉が意味をもつのではないだろうか？何を忘れないのか、めいめいに考えることもかもしれない。

最後に、集まった募金を贈った北上小学校は、今年から3校が統合されたもので、内2校は津波にのまれてしまった。残された学校に身を寄せて授業をそれぞれに行っていたという。そこにはどんな「記憶」が詰め込まれているのか、忘れようとするることによって学校生活が成り立っているのか、等々について、交流を続けてきた千歳台小学校校長に聞いてみたい。後日、紹介したいと思う。



灯籠はプラスチックのコップに5つの小学校の児童が描いた絵を巻きつけたもの。LEDのキャンドルライトが、駅前広場を灯した。

- 船橋まちづくりセンター 人事異動
- 転出 芳賀 茂 成城出張所へ
- 黄地 貴子 退職
- 菅沼 正 成城出張所より
- 原 和子 祖師谷まちづくりセンターより
- 希望丘小学校 校長人事異動
- 転出 千葉 秀一
- 転入 高藤 浩
- 千歳台小学校 校長人事異動
- 転出 塚田 俊雄
- 転入 小宮 豊



# 津波にのまれた東松島で祖父母を探して

K・T(21歳・大学生)

希望丘小学校・希望丘中学校を卒業し、この町で育ったK君。宮城県東松島市に住む祖父母を、津波で亡くしました。

震災当時は高校の卒業式を終えたばかりでした。今年の3月11日、K君はフェイスブックに初めてその時のことを記しました。それが友だちから友だちへ、そして大人たちへと広がっています。ミニコミちとせ編集部ではより多くの方に読んでいただきたいと考え、ご本人・ご家族の了承を得て、ここに掲載するにしました。編集会議で話し合い、言葉や表現は可能な限りそのままにしました。みなさんはどのような感想をもたれるでしょうか。

## 連絡が途絶えて

僕は高校を卒業した数日後、2011年の3・11の津波で母方の祖父母を亡くしました。

震災発生直後、宮城県東松島市にいる母方の祖父と連絡が途絶えました。

SNSで情報提供を呼びかけても、「ルール違反だ」とか、「本部に通報しておきました。もう助かりません。残念でした。」などの心無い誹謗中傷を浴びせられる一方でした。結局、有力な情報が得られぬまま、数日が過ぎました。

5日ほど経ち僕と母で被災地に向かうことになり、寄付出来るようにリュックとカートに衣類や物資を詰め込みました。状況が掴めなかったため、何ヶ月も費やす覚悟でいました。飛行機で羽田から山形の庄内空港を経由して仙台までバス。夕方に着いた仙台市内のバス停は長蛇の列でした。

祖父の家は宮城県中部の東松島市にありました。バス停で野宿をする予定だったところ、石巻市から仙台市内に給油しに来ていた方に車に乗せてもらえることになりました。その中で、様々な話を聞きました。被害が深刻だった石巻市では、警官から拳銃を奪った人がいること、バットを持って徘徊している人がいること、包丁を持って民家を襲い、おにぎりをよこさないと言った人、津波は高さ25mはあったと思われたこと……。

当時、食料供給がままならない状態で、地域によっては一週間に一世帯でおにぎり一つを分け合う場所もあったそうです。

## 母への感謝

東松島市の役所で降りてもらい、そこで消息確認を取りましたが行方不明のままでした。近くに母の親友の実家があったので、そこで一晩泊めていただくことになりました。道中、母は僕のことを「守らなくては」とずっと口にしていました。泊めていただく家に着いて、母がその家の方々の前で泣きながら土下座をして、「私たちなど玄関で充分です。お願いですから一晩だけでいいので屋根の下に置いて下さい。」と言いました。

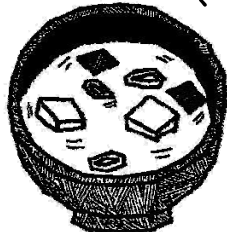


僕はそのとき、内心とても感謝していました。母は必死でどんな手段を使っても僕を守ろうとしてくれていました。僕はこの人が母親で本当に良かったと思っただけで、本来であれば僕が守らなくてはならないのに、助けられてばかりで、と情けない気持ちになりました。

すると、その家の方がおにぎりと味噌汁を出してくれたのです。この恩は一生忘れません。

翌日、遺体安置所を回りました。母が遺体安置所で確認している間、僕は空を見ながら荷物番をしていました。石巻西高校にいたときあるおじさんが話しかけてきました。事情を説明したら、「そうか、お母さんを守ってあげるんだよ。」と言いつつおにぎりをくれました。もう一つはかりで申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

結局、多くの遺体安置所を回りましたがどこにもいなかったので、自宅に向かうことになりました。途中、大きな曲線を描く道路を歩きましたが、周りは津波で沈んだ家や車がたくさん浮かんでいたことを覚えていきます。



## 悲しい再会

祖父の住む野蒜(のびる)には山の裏から入りました。津波の痕がいたるところに残っていました。それは小学生のときに見た、戦争の空爆の跡と何も変わりませんでした。地面は水浸しで、空気は海水で湿っていました。

線路は電車が倒れ、砂にまみれていました。倒壊し、車が斜めに食い込んでいる家もありました。しばらく歩いて祖父の家に着くと、形こそ残っているも、惨状でした。倒れた電柱や流れ出た家のモノをよけながら、「おじいちゃんーおばあちゃんー!」と呼びかけました。瓦礫をよけながら家の中に入ると家具は倒れ、一面泥だらけで滅茶苦茶な状況でした。

母が「ちゃん! いた! おじいちゃんいた! 自衛隊呼んで来て!」と言ひ、僕は呼びに行きました。僕は歩きながらひたすら空に向かって大声で泣き叫んでいました……。

自衛隊の方を呼びに行き、誘導している途中、自衛隊員に「まだ? 本当にいるの?」と言われました。自衛隊の方々が動いてくれたのは知っていましたが、これだけは許せませんでした。

戻ってきたら、祖母の遺体も見つかっており、確認した後に自衛隊の車に乗せて、遺体安置所に向かいました。生き残った人はほとんどいませんでした。石巻西高校の体育館に泊まった晩、僕は一晩中悔しくて泣き続けました。

翌日、僕は避難所にいた子に持っていたチョコシートをあげました。物をあげたところでその子が救われるわけではありませんが、何かしたいという思いの一心でした。

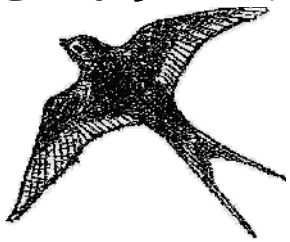
葬儀のときに白く化粧されていた祖父母は人形のようにしか見えませんでした。現実を受け入れられない気持ちが、そうさせていたのかも知れません。

震災が起きる数時間前の午前中に母と祖母が電話をしました。FAXで送った僕の作文を読み、「立派な文章が書けるようになった」と、褒めてくれたそうです。

震災が起きる数日前、僕が祖父にそっちに遊びに行くと言ったら、「安い肉食わせてやるからな」と言われました。これが最期の電話でした。

## どう向き合ったらいいのか

東京に戻って来てからしばらくは夜になると、震災のときの光景がフラッシュバックして、悲しみと罪悪感に苛まれる日々が続きました。髪や髭も剃らずに生きることに絶望してしましました。



被災地から戻ってきてからしばらく風に向き合つかをしばらく悩みました。「忘れていくことは悪いことなのではないか?」と眠れなかった日々もありました。でも、「祖父母は僕が苦しむことを望んでいるのか?」と考えるようになってから、少しずつ忘れていくようになりました。

しかし、それでも実際には残るみたいで大学の授業中、震災に関する英文を読んだ際に、過呼吸になり倒れ授業を中断させてしまったこともあります。忘れようとしていましたが、潜在的には残るみたいです。

比べるものではありませんが、これが戦争であれば憎む相手があります。しかし、天災は憎む相手すらいません。「3・11を忘れない」と耳にしますが、何を忘れないのでしょうか。出来事でしょうか? 教訓などあるのでしょうか?

関心が無いならまだしも、3・11を食い物にしている人間やメディアを許せません。必要としているのは偽善ではありません。メディアが報道するのは全体的に見た震災に偏りがちです。そこであえて個人に焦点を当てることで、今までとは違った視点で東日本大震災を知っていただけたかと思えます。

長い上に拙い文章になりましたが、最後まで読んでいただきありがとうございます。みなさんが、東日本大震災とは何だったのかを考えていただくきっかけになれば幸いです。

\*タイトルと小見出しは編集部でつけ、ご本人・ご家族の了承をいただきました。(編集部)

6/1(日)船橋あおばまつり	池田児童遊園,船橋地区会館ほか
8(日)エコフェスタちとふな	船橋小学校体育館ほか
8(日),6/28(土),7/27(日)	
スタンドパイプ操作訓練	船橋会町内各所
25(水)森繁久彌さん映画会	平安世田谷
7/5(土)船橋小学校避難所運営訓練	船橋小学校
12(土)ふなっ子夏まつり	船橋小学校
19(土),20(日)希望ヶ丘団地夏まつり	希望ヶ丘団地広場周辺
19(土),20(日)千歳台廻沢盆踊り大会	千歳船橋駅前広場
20(日)ちとふなまつり夏	千歳船橋駅前広場
8/17(日)ちとふな盆踊り大会	千歳船橋駅前広場
30(日)フレール西経堂夕涼み会	フレール西経堂第一集会所前

平成26年4月1日から2年間の任期を務める編集委員です。よろしくお願いたします。	
顧問	駒井澄子 (地区町会・自治会連合会)
編集長	古我照彦 (船橋葭根会)
副編集長	松園伸子 (船橋葭根会)
副編集長	野原理永博 (地区町会・自治会連合会)
編集委員	中井基通 (船橋会)
	萬木雅智 (フシール西経堂自治会)
	綱木雅智 (千歳台廻沢自治会)
	佐藤友子 (希望ヶ丘団地自治会)
	内山京子 (民生委員・児童委員協議会)
	岡崎京子 (青少年船橋地区委員会)
	宇都宮美和 (日赤船橋分団)
	和久井直美 (船橋小径の会)
	西川美枝 (船橋小径の会)
	(カックコ内は推せん団体)

編集後記

3月11日の大震災後、東北3県の被災地に多くの内外メディアの取材班が入った。新聞やテレビまたは雑誌を通して、わたしたちは、大惨事を知らされた。また、あたかも現地に行ったかのように、間接的体験を語り合ってきた。しかし、K君は違う。母と被災地に向き、現場に立ち、かつ惨事を目撃してきた直接的体験です。若者らしい自分自身の視点から収集した生の現場感覚体験の記録を、読者に伝える。つまり、読者の心と頭の奥底にまで届く文章だと思えます。(照)